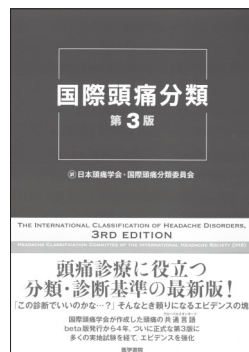


日本頭痛学会・国際頭痛分類委員会：記

国際頭痛分類 第3版

評者

戸田 達史（東京大学教授・神経内科学）



●頭痛診療の大きな武器！

これまでの調査によれば、わが国の頭痛罹患率は40%近くに上るとされており、脳神経内科医にとって避けては通れぬ common disease であることはご存じの通りである。日本神経学会としても、脳神経内科がこれまで以上に診療に注力していくべき疾患として、脳卒中、認知症などとともに頭痛を挙げ、ファーストコンタクトをとる科としての役割を強調している。しかしながら、頭痛診療は難しい面があることも事実で、苦手意識をもつ脳神経内科、脳神経外科の専門医も少なくない。特に、患者からの多様な訴えをうまく聞き出さねばならず、その内容から膨大な鑑別診断を見極める作業は多くの脳神経内科医が難渋しているものと思われる。本書の初版が1988年に発行されたとき、その診断基準のシンプルさに驚かされた。多岐にわたる頭痛の症状をA～Eのたった5つの項目にまとめていたからである。そのシンプルさは今版にももちろん引き継がれている。

さて、本書は国際頭痛学会（International Headache Society）が2018年1月に発表した『International Classification of Headache Disorders, 3rd edition』の日本語訳である。前述したように、初版が1988年に、第2版が2004年

に、そして第3版 beta 版（2013年）をはさみ、今回正式な第3版が出版されるに至っている。初版では、エキスパートオピニオンに基づく分類が多かったように思うが、版を重ねるにつれエビデンスの強化が図られてきた。原書第1版の序文には、「あらゆる努力を傾けたにもかかわらず、いくつかの誤りは避けられなかった」と国際分類の前置きとしては随分弱気なコメントがある。しかし、いかに弱気であっても、勇気をもって最初の一步を踏み出すことがいかに重要か、これが今版を読んで思うことの1つである。勇断により生み出された統一的な分類が臨床試験を促進し、その結果、確立されたエビデンスが次版に組み込まれ、ブラッシュアップされた分類がより精度の高い臨床試験につながり……といった好循環のらせん形が作り出され、そのらせんの先頭に位置するのが今版なのである。

前版の第3版 beta 版からどのような変更がなされているであろうか。その主たる部分は、beta 版を作成した目的である実地試験の結果を反映できたところにある。各項目、細やかな見直しはなされ、確かに精度が高まっている。ただ、残念ながら beta 版作成時に期待された国際疾病分類改訂第11版（ICD-11）のコードを収録することは

できていない。ICD-11の公表がずるずると遅れてしまったため、この点は致し方ない。

本書は日本頭痛学会・国際頭痛分類委員会により翻訳されたが、翻訳関係者の中心メンバーの多くは日本神経学会の頭痛診療ガイドライン作成委員や頭痛セクションのメンバーである。頭痛学の基礎と臨床に精通したエキスパートによる翻訳であり、原文に忠実でありながら、わが国の読者が理解しやすいように翻訳や訳語の選択にさまざまな工夫がなされていることも本書の特徴である。

頭痛というのは common disease でありながら、患者の平穏な生活を脅かす厄介な疾患である。この厄介な疾患に正確に対処し苦痛を取り除くこと、それが国民が求める脳神経の専門家としての脳神経内科の役割の1つである。幅広い神経学分野において、本書ほど網羅的にすべての疾患を診断基準とともに分類したものは珍しい。この頼もしい武器を手に脳神経内科医1人ひとりが臨床の場で存在感と影響力を発揮することを期待する。

B5 頁280 2018年11月 医学書院刊
定価：本体4,800円＋税
[ISBN978-4-260-03686-3]